

【 復活讃詞 第3調 】

てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの
天 在 者 樂、地 在 者

よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら
悦 主 其 臂 力 顯

わして、しをもってしをほろぼし、ふ復
死 以 死 滅 ぼ し、 復

くかつのはじめとなり、われらをぢごく
活 首 我 等 地 獄

のはらよりすくい、せかいにおおいな
腹 救 世界 大

るあわれみをたまいたればなり。
憐 賜

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
何 時 世 世

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

しととひとしくどうぎなるものちゅう
使 徒 等 同 座 る 物 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神 智 の 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う
 満 器 我 國 光

し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き よ う せ い ニ コ ラ イ
 照 お 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ぢ の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
 全 世 界 の 爲 に 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。
 三 者 祈 給

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と
 なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、 罪を行ふ者を棄てずして、 其救の爲に痛悔
 を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を
 以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が靈と體と
 を聖にし、 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等 を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

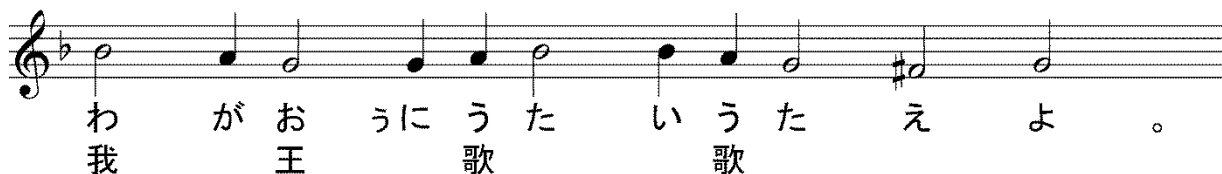
誦經) プロキメン、我が神に歌い歌えよ、我が王に歌い歌えよ、

わがかみにうたいうたえよ、わがお王
 我 神 歌 歌 我 王
 うにうたいうたえよ。
 歌 歌

誦經) 萬民よ、手を拍ち、歡の聲を以て神に呼べ、

わがかみにうたいうたえよ、わがお王
 我 神 歌 歌 我 王
 うにうたいうたえよ。
 歌 歌

誦經) 我が神に歌い歌えよ、



【 使徒經 (アポストロス) 250 端 コロサイ書1章12節~18節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{じん たつ}コロサイ人に^{しょ よみ}達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^きみて^き聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{われかみちち} 我^{かんしや} 神父に^{そのわれら} 感謝す、^め 其^{しょせいと} 我等を^{とも} 召して、^{こうめい} 諸^{ぎょう} 聖徒と^{ぶん} 與に^{ぶん} 光明の業に分あらし

^{もつ} むるを^{かれ} 以て^{われら} なり。彼は^{くらやみ} 我等を^{けん} 黒暗の^{すく} 權より^{そのしあい} 拯いて、^{こくに} 其^{うつ} 至愛の子の^{けだしわれら} 國に^{けだしわれら} 遷せり、^{けだしわれら} 蓋^{けだしわれら} 我等

^{かれ} 彼に^よ 由りて、^{そのち} 其^{もつ} 血を^{あがない} 以て、^{およ} 贖^{つみ} 及び^{ゆるし} 罪の^え 赦^え を^{かみ} 得たり。彼は^み 見る^べ 可から^{かみ} ざる^{かたち} 神の^{かたち} 像^{かたち} に

^{ばんぶつ} して、^{さき} 萬^{うま} 物の^{もの} 先に^{けだしばんぶつ} 生れたる^{かれ} 者^よ なり。蓋^{つく} 萬^{てん} 物は^あ 彼に^{もの} 由りて^ち 造られたり、^ち 天に^ち 在る^ち 者、^ち 地

^あ に^{もの} 在る^み 者、^み 見る^べ 可^み き^べ 者、^{もの} 見る^{あるい} 可^{ほうざ} から^{あるい} ざる^{しゅせい} 者、^{あるい} 或^{しゅりよう} は^{あるい} 寶^{あるい} 座、^{あるい} 或^{あるい} は^{あるい} 主^{あるい} 制、^{あるい} 或^{あるい} は^{あるい} 首^{あるい} 領、^{あるい} 或

^{けんべい} は^{いつさい} 權^{かれ} 柄、^{もつ} 一^{かつかれ} 切^{ため} 彼^{つく} を^{かみ} 以て、^{ばんぶつ} 且^{さき} 彼の^{ばんぶつ} 爲^{かみ} に^{ばんぶつ} 造^{かみ} られたり。彼は^{ばんぶつ} 萬^{かみ} 物^{かみ} より^{かみ} 先^{かみ} に^{かみ} して、^{かみ} 萬^{かみ} 物^{かみ} は^{かみ} 彼

^よ に^た 由りて^{かつかれ} 立つ。且^{そのからだ} 彼は^{きょうかい} 其^{かしら} 體^{かみ} たる^{かみ} 教^し 會^し の^し 首^し なり、^し 彼は^し 元^し 始^し に^し して、^し 死^し の^し 中^し より^し 首^し め^し て

^{うま} 生れたる^{もの} 者^{そのばんじ} なり、^{おい} 其^{しゅ} 萬^{ため} 事に^{ため} 於^{ため} て^{ため} 首^{ため} たらん^{ため} 爲^{ため} なり。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者とならせて下さった父なる神に、感謝することである。神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった。わたしたちは、この御子によってあがない、すなわち、罪のゆるしを受けているのである。御子は、見えない神のかたちであって、すべての造られたものに先だって生れたかたである。万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られたからである。これらいつさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである。彼は万物よりも先にあり、万物は彼にあって成り立っている。そして自らは、そのからだなる教会のかしらである。彼は初めの者であり、死人の中から最初に生れたかたである。それは、ご自身がすべてのことにおいて第一の者となるためである。

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第3調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ われなんぢ たの ねが われよよ はぢ え} 主よ、我爾を恃む、願わくは我世に差を得ざらん、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{わ ため けんご かくれが われ つね かく え たま} 我が爲に堅固なる避所となりて、我に常に隠るを得しめ給え、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書85端 17章12~19節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、

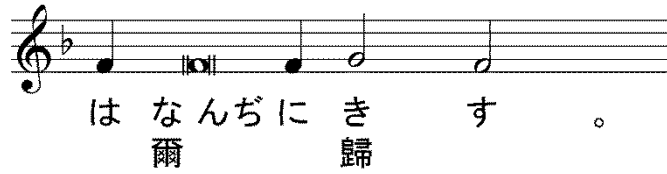


なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聽くべし、

司祭) 彼の時イイスス或村に入るに、癩病者十人彼を迎え、遠く立ちて、聲を揚げて曰

えり、イイスス夫子よ、我等を憐め。イイスス彼等を視て、曰えり、往きて、己を司祭等

に示せ。彼等往く時潔まれり。其中一人、己の愈されしを見て、返りて、大聲を以て

神を讚榮し、イイススの足下に俯伏して感謝せり、彼はサマリヤの人なり。イイスス曰え

り、潔まりし者は十人に非ずや、其九は何處に在るか、此の異族人の外、如何ぞ返り

て、光榮を神に歸せざる。又彼に謂えり、起ちて往け、爾の信は爾を救えり。

(比較用 口語訳) イエスがある村にはいられると、十人のらい病人に出会われたが、彼らは遠くの方で立ちとどまり、声を張りあげて、「イエスさま、わたしたちをあわれんでください」と言った。イエスは彼らをごらんになって、「祭司たちのところに行って、からだを見せなさい」と言われた。そして、行く途中で彼らはきよめられた。そのうちのひとり、自分がいやされたことを知り、大声で神をほめた。たえながら帰ってきて、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。これはサマリヤ人であった。イエスは彼にむかって言われた、「きよめられたのは、十人ではなかったか。ほかの九人は、どこにいるのか。神をほめたたえるために帰ってきたものは、この他国人のほかにはいないのか」。それから、その人に言われた、「立って行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのだ」。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ